

# ムギとイネの藁利用について

## — 東京都東久留米市・小平市の事例 —

川上 香（江戸東京たてもの園）

### Utilization of wheat and rice straw - Cases study in Higashi-Kurume City and Kodaira City, Tokyo

*Kaori KAWAKAMI*

Edo-Tokyo Open Air Architectural Museum

#### 1. 背景

2012年1月から2月にかけて、自らが所属する「江戸東京たてもの園」での調査（小麦と武蔵野のくらし展の開催準備）過程において、2のインフォーマントの聞き取りと耕作地の観察から副次的に得られたムギとイネの藁利用についてまとめる。

#### 2. インフォーマントについて

A 東京都東久留米市在住、男性、70代、農業従事。  
B 東京都小平市在住、男性、60代、農業従事。

#### 3. ムギとイネの藁利用について

##### (1) はじめに

インフォーマント A と B が耕作を行う東久留米市と小平市は、武蔵野台地の中央部に位置する。武蔵野台地は東京都青梅市から東に向かって広がる扇状地で、北を荒川、南を多摩川に挟まれた小高い台地である。台地を流れる川は枝状の小規模なもので、台地の周縁部や川沿いのみ水田が見られ、農業の中心は畑作であった。

江戸時代の小平市小川村の様子を記した村明細帳（1821年・文政4）には、作物は「岡稲・大麦・小麦・粟・稗・蕎麦・荳・辛子・菜・大根・大豆・小豆・芋」と記されており、古くからムギと雑穀栽培を行ってきた地域であることがわかる（『小平市史料集』1993年）。

江戸時代後期からサツマイモや陸稲が耕作され、明治時代から大正時代には、養蚕が盛んになり、蚕とクワ苗で現金収入を得ていた。大正

時代頃から、関東大震災の影響や鉄道網の発達により都市民が流入し、宅地化が著しく進んだ。現在、専業農家数は両市をあわせて165軒ほどである（東京都統計局2005年）。

インフォーマント A は、現在、果樹を中心とした農業を営んでいる。昭和30年代頃までは、畑でコムギ・オオムギ・イネ（ウルチイネ・モチイネ）・サツマイモ・野菜類を栽培していた。インフォーマント B は、現在、野菜を中心とした農業を営んでおり、コムギの栽培経験がある。1町歩ほどの耕作地があり、サツマイモや野菜を市場で販売し、オオムギとイネ（ウルチイネ・モチイネ）は自家用に栽培している。両者とも水田はなく、イネはすべて陸稲である。

##### (2) ムギとイネの藁利用について

『モチの文化誌』（阪本寧男・1989年）で、正月の注連飾りがモチイネを専らに用いたものであることが報告されている。インフォーマント A と B にムギとイネの藁利用について、その用途が分かっているかどうか聞き取りを行った。その内容は表1のとおりである。

##### ① サツマイモへの利用

ムギが収穫された後、畑で広く作付けされるのはサツマイモとイネ（陸稲）であった。しかし、陸稲は夏の日照りに弱いため、収穫が天候に左右されにくく、市場にも出せるサツマイモの作付けがイネより多かった。このため、サツマイモのツル苗を作る温床、サツマイモ床が多く作られていた。



表1 ムギとイネの藁の用途

	コムギ藁	オオムギ藁	イネ（ウルチイネ）藁	イネ（モチイネ）藁
A	農業資材 肥料	肥料	屋敷の風除け資材 農業資材 肥料	結束材 肥料
B	肥料	農業資材 肥料	屋敷の風除け資材 農業資材 肥料	屋敷の風除け資材 農業資材 肥料

コムギ藁やイネ藁で四角い囲いを作り、中に落ち葉やヌカなどを入れて発酵させ、その熱でサツマイモの芽出しを行う（図1）。3月下旬にイモを並べ、5月初旬にツルを刈り取り、苗とする。Aは昭和30年代まで、Bは現在でもサツマ床を作っている。

AもBも、発酵熱で出る水分をほどよく逃がし、かつ、サツマイモの保温材として利用したのがコムギの籾殻であった。Bはコムギを利用していたが、周囲が宅地化され、畑の風通しが悪く、また、風が吹いても宅地を通して強風となるため、コムギがなぎ倒されることもあり、コムギ栽培を行えなくなった。現在はコムギに比べ、倒れにくいオオムギを栽培し、その稈を細かく粉碎して、コムギの籾殻のかわりにサツマイモにふりかけ、保温材としている。

## ②肥料

AとBは両者とも、コムギ藁は太く固く、オオムギ藁はコムギに比べやわらかいと認識している。コムギもオオムギも収穫後の切り株はそのまま畑に残し、分解させて肥料とするが、オオムギ藁の方がやわらかく分解が早いと考えている。オオムギ藁は、ほとんど肥料とした。

## ③屋敷の風除け

AもBも、ウルチイネ藁を屋敷の風除けにしたという（図2）。作物が畑からなくなる冬は、風を遮るものがなく、寒さと風で舞い上がる土から屋敷を守る風除けが必要であった。

Bは、モチイネ藁も風除けにした。Bの家では、ウルチイネよりモチイネの方が作付けが多いので、広い範囲にわたる屋敷の風除けにモチイネも利用した。Bは、風除けとしたウルチイ



図1 サツマ床（2012年撮影）



ネ藁をサツマ床のオオムギ藁の上に均等に敷いて、オオムギ藁と同様にサツマイモの保温材としている。

Aは、かつて2 mほどの高さの竹組みを家の北側の垣根に這わせ、ウルチイネ藁をかけて風除けとした。この風除けが必要なくなる4、5月には、植えつけたサツマイモの苗と苗の間に、風除けに用いたウルチイネ藁を長い稈のまま置いた。サツマイモが肥大化する頃に苗間のウルチイネが土中で分解され、サツマイモの肥料となるという。Aは、昭和30年代頃までのウルチイネ藁は現在のウルチイネ藁にくらべ、長くやわらかかったと記憶している。

#### ④ 結束材

Aは、冬の間、モチイネ藁を何本かつなげ、ひも状のものを何百本と作り、ムギの収穫時、束ねたムギを結束するために利用した。ムギの脱穀時に解きやすく作業がしやすいよう、モチイネ藁の両端をくるくる巻いてムギ束に挟み込んで結束した。

#### ⑤ サツマ床利用以外の農業資材

Aは、地這いのキュウリやスイカなどを栽培する際、コムギ藁を苗の周りに敷いて栽培した。コムギ藁は分解しにくいので、長期間にわたって土の表面に届く陽を遮り、雑草の制御に役立

ち、かつ土中の保水が行える。

また作物のツルがコムギ藁をしっかりとつかんで成長していくので、特にスイカなどは風が吹いても転がりにくく、傷がつかないなどの利点があった。

#### (3) おわりに

「落ち葉一枚無駄にしない」という、かつての農業慣習の中で、ムギとイネの藁は、気候や栽培作物に即した利用が行われていた。また藁の固さなどによって適材適所に利用する智慧があった。一部の農家では現在でもムギやイネの栽培と、稈の利用が継承されていることを確認することができた。



図2 Bの屋敷の風除け (2012年撮影)